

その日は風が強く、空はぶ厚い灰色の雲に覆われていた。

ロイロット家を訪問した二日後。コナンとアーサーは再度屋敷を訪れていた。

天候のせいか、屋敷は一昨日よりさらに不気味に見える。強風のため風音も前回以上だ。うおんうおんと獣の唸り声じみて辺りに響いていた。

コナンがノックすると、ドアはすぐに開いた。出迎えたのは、今回もヘレンだ。

「よく来ていただけました、ホームズ様。ワトソン様も」

「こちらこそ、無理を言っすみませんでした。電報でのやり取りには、一抹の不安があったのですが、上手くいったようですね」

「主人は雑事には関わろうとしませんので。使用人に注意しておけば、気付くことはありませんわ。ともあれ、お入り下さい」

ヘレンの招きに応じて、コナンとアーサーは屋敷の玄関ホールに入る。外は曇り空のせいで昼間なのに薄暗かったが、屋内に一步入ると、幾つもの電灯に明々と照らされ眩しいほどだった。

いまだき電灯は珍しくないとはいえ、個人の邸宅に備えているのは一部の富裕層ぐらいだ。

まだまだ一般人の家にまでは普及していない。ベーカー街222Bは例外中の例外なのである。

「前回も気にはなっていたが……ロイロット博士の素性を知った上で見ると、壮観だな。さすがはサクラダイト研究家だ」

「うちも負けていられないぞ。そう言えばいつかのアーク灯が調整途中のままだし、今度あれをー」

「いらん」

壮観ではある。だが、建物そのものは中世の館の如き古さだ。その中を電球の白々とした明かりが照らす様子は、やはり歪なギャップがあった。アーサーと軽口を交わしながらも、コナンは油断なく周囲に注意を払った。

「お伝えした通り、主人は朝から家を空けております。戻るのは夜になるはずです。使用人も呼んでおりませんから、今日なら屋敷は私どもだけですわ」

「助かります。ロイロット博士には申し訳ないが、どうしても彼の研究室を調査しておきたかったのです」

アーサーはぬけぬけと言ったが、主の留守中に妻の手引きで、使用人すらいない屋敷に入っているのだ。正直外聞は悪い。と言うより、訴えられでもした日には、コナンたちに勝ち目は

ないだろう。

ともあれ、二人はヘレンに案内され、博士の研究室に移動した。

知ってみればもつともなことだが、研究室になっていたのは、屋敷に併設する鉄塔の真横だった。鉄塔に面する奥の壁は、一部取り壊されたのち、金属板で塞がれている。その金属板には数え切れない機器が取り付けられており、それぞれの機器に複数の計器メーターが備わっていた。また、床には所狭しとコードが這い、文字通り足の踏み場もない有様だった。

最初にこの屋敷に入ったときも、コナンは自分たちのリビングに似た雰囲気を感じていた。だが、この研究室は似ているところではない。ベーカー街のリビングをイーより悪い方にイー加速させたような場所だ。アーサーなど、涎を垂らさんばかりになっている。

「す、素晴らしい！ これほど機材、国の施設でもお目に掛かれないぞ。サクラダイトの精製機まであるじゃないか！」

「……確かに、素人目に見ても、在野の研究者とは思えない規模だな……」

「こっちはサクラダイトの保管庫か？ これだけの量を一体どうやってーいや、ブリタニアのツテに決まっている。くそつ。いくら銀助の実家がニッポンの名家とはいえ、やはり民間の流通ではたかがしれているなあ！ これだけあるなら、幾つか拝借してもー」

「アーサー！ 余所見してないで、本命を探せ！」

まるでマタタビキャットニップの貯蔵庫に飛び込んだ猫の如しだ。依頼人の目も忘れて興奮するアーサーに、コナンは目を尖らせて釘を刺す。

そしてヘレンに向き直り、

「何がどこにあるか、ミセス・ロイロットにはおわかりですか？」

「申し訳ありません。主人の仕事のことは、私にはさっぱり。この部屋にも、誰も立ち入らせようとしませんもの」

念のため確認したが、案の定ヘレンは困惑しながら首を横に振った。当然と言えば、当然だろう。コナンにしろ、アーサーの発明品に関する知識など限られる。ましてや、一昨日見たロイロット夫妻の様子では、仕事に関する会話など皆無に違いない。

「んんっ、お、おい、見る、コナン！ この液体……まさか、サクラダイトか？ そう言えば最新の論文にそれらしい記載はあったが、本当に流体化に成功していたとは？」

「アーサー？ なんて言えばー」

「サクラダイトは流体化した状態だと、かなりの可燃性や誘爆性があるらしい！ これだけの量があればー」

「また爆発か！？ いい加減にしろよ？ お前はとにかく、目的の物を探してくれ、頼むから！」
何しろ、コナンではどれがお目当ての機械なのか見当も付かない。アーサーに頼るしかない

のだが……これは予想外に時間がかかりそうだ。時間は十分ある予定だったが、案外余裕はないかもしれない。

そして、コナンの予想は当たった。

コナンに叱責されたあと、アーサーは大人しく捜索作業を続けたが、何しろ機器の数が多し。アーサーにせよ、実物を見たことがあるわけではないのだ。未知の機器を前にひとつずつ検証していったが、どうしても時間はかかった。

「あの、ホームズ様。ワトソン様。一度休憩されてはいかがですか？」

気がつけば屋敷を訪れて一時間が経過していた。いつの間にか研究室を出ていたヘレンが、紅茶を淹れて来てくれた。コナンは礼を言ってカップを手取る。対して、アーサーは紅茶をがぶ飲みしたあと、スコーンを囓りながら作業に戻った。

本来の目的は当然あるが、

「こんな宝の山の前に、ティーブレイクなどしてられるか」

と言うことらしい。本当に本来の目的を見失っていないか、コナンは少なからぬ不安を感じた。

「申し訳ありません。アーサーは一度火が付くと、周りのことが目に入らなくなってしまいう質でして……」

「あの、ワトソン様？ ホームズ様は一体何を探しておられるのですか？ 主人の作った何かなのですよね？ それが、パーマーの死に関わっているのですか？」

恐る恐る尋ねるヘレンに、コナンは、しまった、と自分を恥じた。

突っ走るアーサーに引きずられて、依頼人のことを失念してしまっていた。突然押しかけて来たが、ヘレンにはまだきちんと説明すらしていなかったのだ。

「はい。実はミセス・ロイロットが仰っていた通り、パーマー・アーミテージの死が自殺ではない——他殺だった可能性が出て来たのです。ただ、密室内にいた彼を殺害するには——」

と、そこまで口にしてから、コナンはようやく口を閉ざした。

いまコナンたちが探しているのは、ヘレンの夫、ピッチャード・ロイロット博士の発明品だ。コナンたちは、その発明品——マイクロ波を照射し対象を加熱する装置こそが、助手のパーマー・アーミテージを殺害した「凶器」だと推理し、その装置を探すべく屋敷に来訪しているのだ。

だが、それはつまり、パーマーを殺害したのがピッチャードだと——少なくともコナンたちがそう考えて動いている証左に他ならない。その事実を——夫妻間の感情がどうあれ——妻のヘレンに面と向かって告げることに、コナンは躊躇った。

「どうされました？ なんでも仰って下さい、ワトソン様」

「い、いえ……その……」

真つ直ぐにこちらを見つめるヘレンに対し、コナンの視線が宙を泳ぐ。一方的にアーサーを責めている場合ではなかった。我ながら迂闊にも程がある。

どう言い逃れるか。そう考えたときだ。

ふと――

「ああ、そうでした。ロイロット博士の件ですが、彼の妻に、彼女が見つけた物を見せるよう――」

「あの……ミセス・ロイロット？ 貴方は、まだ俺たちに言っていないことがありますか？

貴方が見つけた物を、俺たちに見せて欲しいのですが――」

なぜそんなことを口にしたのか、コナン自身にもわからなかった。ただ、あのとき、夕焼けが落とす血のように赤い景色の中で、あの男が口にした台詞が、偶然脳裏を過つたのだ。

調査に没頭していたはずのアーサーが、「――コナン？」と手を止め、顔を上げてこちらを振り向いた。

そして、

「……あら」

ヘレンは目を丸くする。

それから、弾けるように、笑った。

「あら。あらあら。私、ずいぶんがっかりしていましたのに。気付かない内に、欺かれていたのですね？」

「……え？」

「しかも、ホームズ家の放蕩児じゃなく、あなたが切り出すなんて、ワトソン様。私、とんだ失礼を」

「ミ、ミセス・ヘレン……？」

コナンは当惑して、間の抜けた声で聞き返した。アーサーがガタツと真顔で立ち上がった。

そして、

「――っ!? これは――」

立ち上がったアーサーが、突然喉元を抑え、よろけて片膝を着いた。

振り返ったコナンも、

「ーあれ？」

急に、床と天井が入れ替わり……いや、違う。視界が回転している。上下が逆にー足がふらついてー

「気付かれていたなんて、私、恥ずかしいですわ。……ほら」

いつしかコナンの頭上に覆い被さるヘレンが、両手を添えて何かを取り出した。

仮面だ。

《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面。その仮面を、ヘレンは頭上から、ぐいっとコナンに突きつける。

「……な……え？」

視界がぐるぐると回転する。天地が入れ替わり、自分がどこにいるのかわからなくなる。

ヘレンは慎ましやかに微笑んでいる。

「私が見つけたのは、これですわ、ワトソン様。ある日、パーマーが寝起きする裏の小屋で、この仮面を見つけましたの。ふふふ。私、やっぱり夫のように頭が良くないですね。この仮面を目にして、ようやく理解したんですもの。でも、《ストランド・ニュース》の取材を受けたとき、思い付きであなたの方のところを訪れたのは正解だったみたい！ やっぱり、頭の出来って違うものなんですわ。あの方が気になさるわけだわ。私、嫉妬してしまいます」

コナンは力を振り絞って身体を起こし、アーサーを見やった。が、アーサーもまた目を見開いたまま、「しまった……！」と床に突っ伏している。

ああ、とコナンはいまさらながらに、気がついた。

さっきの紅茶。どうして自分は、なんの疑問もなく口にしてしまったのかー

いや、無理だ。わざわざ事件解決を懇願して来た依頼人を、どうして疑えるだろう。

「悔しいわ。ああ悔しい。私、どうすればいいのでしょうか。ねえ？ ワトソン様。コナン・ワトソン？ あなたはどう思われるかしら？」

ヘレンの声がわんわんと反響しながら木霊する。それは、この屋敷と鉄塔が奏でる、地鳴りのような風音に似ていた。

「あ……アーサー……」

突然牙を剥く、狂気。

これも、自分たちの因縁なのだろうか。

「貴方と貴方の相棒がいかに危うい橋を渡っているのかー」

あの男の言う通りだった。自分は何もわかってはいなかった。自分たちは、あまりに、子供

だ。

コナンの意識が闇に飲まれる。

ヘレンの引きつるような笑い声が、最後まで耳にこびり付いていた。

*

「お、起きたか？ 気分はどうだい、コナン？」

懐かしいその声に、コナンはまどろみから浮上する。ベッドの上で身体を起こすと、隣に椅子に座る兄がいた。

思いつく。自分は熱を出して寝込んでいたのだ。だが、十分な栄養と睡眠を取ったいま、身体はずっと楽になっていた。まだ倦怠感が残っていたが、気分は決して悪くない。

頷く弟に、兄は穏やかに微笑み掛けた。

「念のため、今日は一日安静にしていなさい。食欲はーまだないか。なら、ホットミルクを作ろう。今日は特別だ。ハチミツをたっぷり入れてやる」

兄の台詞に、頬が綻ぶのがわかった。最近では甘い物で釣ろうとー幼い子供扱いする兄に反発ばかりしていたが、いまは素直に嬉しかった。

頼もしく、優しい、兄。最近では滅多に口にしないがーコナンの自慢の、大好きな兄だ。

「もう少し寝ていなさい。ミルクが温まったら、起こしてあげるから」

コナンは頷いて、もう一度布団を被る。

そして、甘いミルクを夢想しながら、うとうととまた、眠りに落ちてー

*

「う……………く……………」

頭の中に濃い霧が立ちこめていた。

直前までの、雲の上にいるような心地よさから、一気に地の底へ落とされた気分だった。吐きそうだ。コナンは寝返りを打とうとしーできなかつた。身体が拘束されている。その事実が、彼の意識を急激に覚醒させた。

「……………な……………こ、ここは……………？」

最初を感じたのは、冷たく固い床の感触。そして冷え切った空気だ。床に横たわっている。だが、背中は少し温かかった。

「え……………あつ。ここ、あの小屋か？」

コナンは横たわったまま、首をもたげて辺りを見回した。

暗い。だが、鉄柵の付いた窓から、月明かりが差し込んでいた。つまり、夜だ。そしていま自分が寝転がっているのは、ロイロット家の裏にある小屋——助手が死んだ、あの鉄の箱の中らしかった。耳を澄ませば、鉄塔が立てる耳鳴りじみた風音も聞こえてくる。

「くっ！」

起き上がるろうとしたが、両手が後ろ手に拘束されていて出来なかった。固い手触りの——おそらくは手錠が掛けられている。ただ、後ろ手に拘束されている「手」は、自分以外の物もあつた。

背後に横たわる、もう一人。

コナンは肩越しに首を捻り、

「アーサー！ おいつ。大丈夫かっ？」

返事はない。代わりに、健やかな寝息が聞こえてきた。「またかっ！」とコナンは怒るのを通り越して呆れた。自動機巧人形のとときといい、つくづく相棒の神経はどうかしている。

「起きろ、アーサー！ このままじゃローストビーフならぬローストマンになっちゃうぞ！」

「……んあ？ コナンか？ 暗いな。ここ、どこだ？」

「マイクロ波の実験部屋だ！」

コナンが怒鳴ると、ようやくアーサーは目を覚ましたらしい。「おおっ！？」と身動きし、コナンの腕を引っ張って倒れた。やはり、コナンの手首とアーサーの手首を、まとめて拘束しているのだ。

「なんだ？ どういう状況だ？」

「落ち着け！ とりあえず、一緒に立つぞ？ タイミングを合わせろ」

「いてて！ 待て、コナン。ゆっくり！ そつとだ！ うう、すっかり身体が冷えてしまっている……温かいミルクティーが飲みたい……ホットミルクでもいい……」

「いいから、立て！」

頼りない相棒を叱咤しながら、コナンはよたよたと二人して立ち上がる。

ようやく暗さに慣れて来た目で室内を見回したが、小屋の中は以前調査に訪れたときのままだった。違うのは、窓が開いていることぐらいだ。おかげで冷えた夜気が流れ込み、吐き出す息が白く曇る。コナンは悲鳴を上げるアーサーを引きずるようにして、出入り口のドアに近付いた。

「くそつ、開かない。鍵を直したのか？ 閉じ込められたぞ！」

「ミセス・ロイロットの仕業かな？ 僕ら二人を一人で運び入れたのか？ あんなに細いのに、力持ちだな」

「感心するのはそこか？ 思い出せ。彼女は仮面を持っていたんだぞ。《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面だ！」

「うん。でも、あれは死んだパーマー・アーミテージの物だとも言っていた。それに、あの変貌振りーと言うより、この場合は二面性と言うべきか。覚えがある」

「……モリアーティか？」

「まあ、間違いないだろうね。でなきや、あんな態度を取る理由もない」

肯定するアーサーに、コナンは、クソツ、と悪態を吐いた。

「つまり、ヘレン・ロイロットはモリアーティの手者だったってことだよな？ 信じられん！」

「そして、死んだ助手、パーマー・アーミテージは、仮面の保持者ーつまり《ジャック・ザ・ナイトメア》の一人だったことになる。とすると……こう言う構図だな。パーマーはヘレン・ロイロットが《解放者》である疑いを抱き、彼女に接近したんだ。そして、彼の疑惑は正しかったがー返り討ちに遭った」

「じゃあ、何か？ パーマーを殺した真犯人は、ヘレン・ロイロットだったって言うのか？」

「状況から推測すると、そうなる」

「馬鹿な。パーマーの死は自殺として片付いてたんだぞ？ なんだって真犯人のヘレンが、わざわざこれは他殺だから事件を解決しろなんて依頼をー」

「もちろん、会ってみたからですわ。モリアーティ様が一目置かれる、名探偵アーサー・ホームズに」

あつけらかんとした声は、開いた窓の、鉄柵越しに聞こえた。

コナンが振り返る。

小屋の唯一の光源である窓の向こうに、ヘレンが立っていた。月光が逆光になって、その表情まではよく見えない。ただ、目を皿のようにして、こちらを見つめているのはわかった。彼女と目が合った瞬間、コナンは全身に氷水を浴びたような錯覚を覚えた。

同じだ。短剣を振り回す、ウィリアム・クラムと。

自動機巧人形を駆る、ロジャー・ステイプルトンと。

泡を吹いて怒鳴る、メリーウエザーと。

精神の籠が外れている。まともじゃない。

「お二人の評判は、仲間内ではすっかり広まっていますのよ？ ずいぶんとモリアーティ様の計画を阻止されたとか。ああでも、お調子者のロジャーはともかく、高弟の一人だったクロエ様は、お二人がお会いする前に亡くなられていたのかしら？」

「『高弟』と来たか。組織観が垣間見えるね。貴方の仰る通り、クロエ・ノートンの死は、言わば自滅だよ。個人的には、生前に会ってみたかった」

「そうでしたか。クロエ様、お勞しい。それでも、仮面のクソどもの手に掛かるのではなく、ご自身の欲望の火に焼かれたのなら、きつと本望だったことでしょう」

「ふむ。やはり貴方は、《ジャック》たちは嫌いなようだ」

「もちろんです。怖気を振りますわ。パーマーが仮面のクソだとわかったときの嫌悪と言ったら……ああ、そうでした。ホームズ様の先ほどの推理ですが、少し訂正させて下さいませ。

あのクソが怪しんで近付いたのは、私ではなく夫のピッチャードです。実際、夫はモリアーティ様の祝福こそ受けておりませんが、《解放者》たちを支える幹部の一人です。ロジャーのお人形を手入れたのも、夫ですよ？ ちよつとした見物だったでございませう？」

「へえ。それを聞いて、いよいよ手に入れたくなったな、あの自動機巧人形。……ちなみに、祝福というのは彼の催眠術——《ギアス》のことで相違ありませんよね？」

「まあ、ホームズ様。催眠術ですって？ 情けないことを仰らないで。あれがそんな卑俗なものなわけがありません。モリアーティ様はかつて、《ギアス嚮団》で《嚮主》の片腕にまで上り詰めた尊きお方。あの方の《ギアス》は、まさに神秘の技なのですよ！」

「……ふふ……なるほど。《ギアス嚮団》に、《嚮主》、ですか。いや、実に興味深い……」

背中合わせのアーサーが、微かに震える声で応えた。コナンなど、口を挟む余地もない。相棒とヘレンのやり取りに、ただただ奥歯を噛み締めるのみだ。

危うい橋を渡っている。

まさに、ジャックが評した通りだった。アーサーは自らの命を掛け金にして、危険極まりない遊戯ゲームに熱中している。

「それで？ 尊きモリアーティ様の同志たる《解放者》ミセス・ロイロットは、このあと僕らをどうするおつもりかな？ 僕らの身柄を彼に引き渡すとか？」

「実は迷っていますの。それでひとつ質問させて頂きたいのですが……ホームズ様？ ホームズ様の身柄は《クラブ》にとつて、どの程度価値があるものなのでしょう？」

その瞬間、ピクツとアーサーの気配が変わった。コナンもとつさに身体を強張らせた。

ヘレンの言う《クラブ》がなんなのか、コナンにも理解できた。以前アーサーから説明されたことがあったし、実際に訪れたこともあるからだ。

《ディオゲネス・クラブ》。

アーサーの家族が運営するクラブだ。

しかし、

「ああ、でも……違いますわね。私の望みは、そういうものじゃない」

とヘレンはあっさり自らの言葉を覆した。

「せっかく捕まえたんですもの。ねえ、ホームズ様？ ホームズ様のーそれにワトソン様の『価値』は、お二人が自ら証明して見せて下さいな」

そう言うと、突然ヘレンは窓から姿を消した。

そして……ガッツと窓に取り付けられた鉄柵に、何かを押しつけられた。

金属製の筒。ただその筒は、背後で人の背丈ほどもある大型装置から伸びていた。アーサーが「げ」と嫌そうな声をもらした。

「磁電管か！」

「な、なんだって？」

「マイクロ波の放射装置だ！」

「なに！？」

コナンは愕然とした。まさに、二人が探していたのが、あのマイクロ波の放射装置なのだ。探しても見つからないはずである。真犯人のヘレンが隠していたのだ。

ただー

「いや、待てよ。俺たちはあの首飾りをしていない！ アーサー？ パーマーが焼死したのは、あの首飾りをしていなかったからなんだよな？ なら、マイクロ波を浴びても、俺たちは死なないはずだ！」

アーサーがマイクロ波派による「発火」実験を成功させたのは、彼がローストビーフを焼き上げた翌日の昼前だ。鍵は、パーマーが死んだとき身に付けていた首飾りだった。

「マイクロ波は金属に反射する。ただ、あの首飾りはかなり複雑な構造をしていたせいで、マイクロ波が首飾りの表面に集中し、スパークが発生したんだ。パーマー・アーミテージが焼死したのは、そのスパークが寝具に引火したためだ」

徹夜明けでグッタリしながら、アーサーはコナンに、そう説明した。正直、理屈を理解しているわけではないが、首飾りがなければ火は出ないことはわかった。

実際、アーサーはコナンの質問に首肯し、

「……ああ。おそらく、焼け死ぬことはない」

「だったら恐れることはー」

「代わりに、煮えて死ぬ」

「ないーって、な、なに？ 煮えて？」

『『発火』せずとも、『加熱』はされる！ 生肉だってローストビーフになっただろ？』

「なら、結局死ぬんじゃないか？」

「結論を急ぐな。マイクロ波の焦点さえ避ければ……」

「助かるのかっ？」

「実験してみないと……」

「頼りない!？」

実際アーサーが狼狽えているのも、背中越しに伝わって来た。ヘレンがクスクスと笑っているが、コナンとしても体面を気にする余裕などなかった。

「それではー」

ヘレンが笑いながら、装置を起動した。グウォン、と低い稼働音と共に、窓の向こうの磁電管マグネトロンが振動し唸りを上げた。

熱さを感じない。目にも何も映らず、ただ耳障りな音だけが響いている。

しかし、いまこの小屋の中は、死刑場が変わったのだ。無味無臭の死が、鉄の箱の中を満たそうとしている。

「クソッ! こんな所でー!」

死ぬわけにはいかない。コナンは奥歯を噛み締める。

そのとき。

「ヘレン」

落ち着いた、しかし力強い声が窓の向こうから聞こえてきた。

聞き覚えのある声。ピッチャード・ロイロットだ。ヘレンが弾かれたように視線を逸らし、母屋のある方向に顔を向けた。

「もう止せ。これ以上、くだらない罪を重ねるな」

姿は見えない。だが、小屋の外にピッチャードがいるのは間違いなかった。コナンだけでなく、アーサーも息を呑んで耳をそばだてた。

「あなた……」

窓の外のヘレンが答える。その横顔からは、直前の狂気も含め、あらゆる表情が削ぎ落とされている。

「邪魔をしないで。これが私の『欲望』なの。私は解放された。私は、私の欲望に忠実でいたいわ」

「それで得られるのは、所詮獣の幸せだ」

「人だって獣よ。私はモリアーティ様に会って、知性より重要なものがあることを理解できた。

私は結局あなたと同じ高さに立つことはできなかつたけど、私にとっての正しい『解』を手に入れたわ」

「お前がそう思うなら、それでいい。私もお前の想いに寄り添おう。これまで通り《教授》プロフェッサーの手助けもする。だから……」

「っ！ 来ないで」

「ヘレン。聞き分けてくれ。彼が、その二人から手を引いたのは、それだけの理由があるからだ。このままではお前は、仮面の男たちだけでなく、あの男さえ敵に回してしまいかねない」

「あら。光栄なことだわ。私なんかモリアーティ様の敵になれるなんて」

「ヘレンッ」

それは、一昨日対面したピッチャードと同一人物とは思えないほど、強い感情の籠もった声だった。

もつとも、コナンは気が気ではない。まだマイクロ派の放射装置は稼働したままだ。気のせいか、顔面の皮膚がチリチリと熱を帯び始めている。ーがする。たとえ錯覚だとしても、死の危険が高まっていることは事実なのだ。

「アーサー！ どうする？」

「ちよつと待ってくれ。もう少しで……」

背後でアーサーが答えたときだ。

「あなたっ！？」

「なっーグッ！？」

それまで石のように表情を殺していたヘレンが、突然顔色を変えて叫び声を上げた。直後、ピッチャードのくぐもった声が聞こえてきた。

ピッチャードの声には、少なからぬ苦痛が滲んでいた。なんだ、とコナンの全身が粟立つ。

「ヘレン！ 逃げろ！」

ピッチャードの叫び声が聞こえた。

窓の向こうに見えるヘレンの横顔が、眦を決し、血の気をなくす。

次の瞬間、ヘレンは髪を振り乱して、窓の側から走り去った。

走り去るヘレンの足音が聞こえる。コナンは息を呑んで窓の外を凝視する。

窓の外に沈黙が降りた。いや、鉄塔が立ってる風音は聞こえているが、それがかえって風音以外の静寂を強調するかのようだ。

マイクロ派の放射装置は、こちらを向いたまま稼働を続けている。だが、不意にその稼働音が停止した。機械が止められたのだ。

そしてー

仮面が、窓の外から、コナンたちをのぞき見た。

「ジャッー」

仮面が小屋の中をのぞいたのは、ほんの一瞬だった。垣間見えた仮面はすぐに姿を消し、窓には停止した磁電管マグネトロンだけが残された。

それでも、一気に加速したコナンの動悸は、元に戻るどころか、激しさを増し続ける。

いまのは……

「よしっ。外れた！」

突然、両手に掛かっていたテンションが消えた。アーサーが自分の手錠を外したらしい。そのまま、今度はコナンの手錠の開錠に取りかかる。コナンは驚いて肩越しに首を傾けた。

「鍵を外したのか！ どうやって？」

「『高弟』クロエ・ノートンの宝宝箱を忘れたか？ こういうのは『慣れてる』って言っただろ」その言葉を証明するように、アーサーはたちどころにコナンの手錠も外して見せた。クロエの住居に忍び込んだときのように、今日も簡易工具を携帯していたらしい。どうやらヘレンは、二人の身体検査まではしなかったようだ。彼女のミスに助けられた。

「アーサー！ さっきの仮面を見たか？ それに、外で足音が聞こえたが、大勢いた。《ジャック・ザ・ナイトメア》だ！」

「ああ。どうやら、パーマー・アーミテージの報復に来たと見える」

「急ごう！」

「そうしたいところだが、生憎僕らは『密室』の中だ」

「ドアの鍵も開ければいいだろっ？」

「僕らは閉じ込められたんだぞ？ 当然、鍵は『外から』だ。鎖を巻いたか鉄の棒を噛ませたか、とにかく物理的にドアを押さえてる」

「なら、力尽くで破る！」

「無理だ。一昨日来たときに調べたが、ドアは極めて頑丈だよ。だからまあー僕らはあくまで『理知的』に行こう。ミセス・ロイロットとは別の『解』で」

そう言うと、アーサーは胸ポケットから一枚のハンカチーフを抜き出した。

ハンカチーフは濡れていた。アーサーはそれを慎重な手つきで引き裂き、ドアの端の上下二箇所、蝶番を覆うように貼り付けた。

「な、何をする気だ？」

「可燃性と誘爆性に関する実験」

「それ、さっき実験室で言ってたーまさか、その濡れたハンカチーフ！？」

「生憎適当な容器を持ち合わせていなかったから、せめて布に染みこませておいた」

嘩然とするコナンを余所に、アーサーは懐から自作の電気式ライターを取り出した。ドアの横の壁に張り付き、「下がって！」と指示する。コナンは一も二もなく従った。

「さあー上手く行くかな？」

壁に張り付いた格好のまま、アーサーがライターを持った腕を精一杯伸ばす。

バチッ。

火花が飛んだ。直後、流体化したサクラダイトを含むハンカチーフが、閃光と轟音を放ち、爆発した。とっさに目を閉じたコナンが恐る恐るドアを見ると、上の蝶番が見事に吹き飛び、鉄製のドアが傾いている。

「もう一丁」

ドカンッ、と爆音。二度目の爆発で、ぶ厚いドアが歪にひしゃげた。ドアと壁を止めていた蝶番など跡形もない。

「凄いな、流体サクラダイト。とにかく、上手くいった！ コナン！」

コナンが頷き、傾いたドアを蹴り開けた。小屋の外に飛び出す。すでに人気はない。走り去ったヘレンはもちろん、ピッチャードの姿もなかった。

だが、月夜の薄闇を見渡したとき、絹を裂くような悲鳴が聞こえてきた。

女性の声だ。屋敷の外。鉄塔のある方角からだった。コナンは駆け出し、アーサーもその後を追う。

「気を付けろ！ 相手はー」

「わかってる！」

コナンは裏庭を駆け抜け、屋敷の横に回り込む。途中、半ば野生化した生け垣が荒らされていた。すでに誰かがここを通ったのだ。コナンもその生け垣を抜ける。目の前に、月光を浴びる鉄塔が現れた。

「うっ……」

コナンが頭上を見上げ、足を止めた。

鉄骨が組み上がって出来た鉄塔からは、無数の電線が屋敷へと伸びている。

その内の一本が千切れー

だらんと手足を揺らす、ヘレンが吊り下げられていた。

胸に突き立てられたナイフを見るまでもなく、絶命しているのは明らかだった。そして、彼女が吊される電線は彼女の身体からさらに垂れ下がりにー

その先端に、一枚の仮面がくくりつけられていた。

忌まわしい、《シヤック・ザ・ナイトメア》の仮面。胸の傷から滴る血が、仮面の上にポタポタと付着していた。

「クソッ！ 間に合わなかったか！」

後から追いついたアーサーが歯噛みしたが、コナンは振り返らず、鉄塔にぶら下がるヘレンを見上げていた。

淡い月明かりでは、ヘレンの顔は見えない。いま彼女は、どんな表情を浮かべているのだろうか。

恐怖？ 後悔？ それとも……。

「連中は去ったようだ」

静かに声をかけられ、コナンとアーサーはぎよっとして振り返った。

ピッチャードだ。右手で左腕を押さえており、一昨日見たのと同じフロックコートは、袖が赤黒く染まっていた。彼もまた負傷しているらしい。

「……去った？ では、貴方は見逃されたわけですか、ドクター」

アーサーが問いかけると、ピッチャードは鼻で笑った。

「私は《教授》の《ギアス》を受けていないからな。直接の抹消対象ではないのだろう。それに、見逃したのは『餌』としてだよ。存外、あの男と配下たちは、情と義理に厚い一面がある。これで私に接触してくれば儲けもの——とでも考えたのだろうか」

「……貴方はモリアーティと面識があるのですね」

「ヘレンの言っていた通りだ。彼は私の知識と技術に関心があり、私は彼の財力と人脈を必要とした。もう何年も前から。だが……ヘレンを会わせただのは誤りだった。あの男に見出されたせいで、ヘレンは……」

ピッチャードが唇を噛み締める。その肩がわなわなと震える。

しかし、彼はやがて、力なく首を振った。

「それでも、結果としてヘレンが己の幸福を手に入れた事実は動かしがたい。正しく観測した事象を否定してはならない。私がついにあたえてやることができなくなった『解』だ」

ピッチャードがアーサーを見やる。その透徹した眼差しは、何故かコナンに殉教者のそれを連想させた。

「私の『解』は、彼女の『願望』と共にある。始末を付けねば。先日も言ったが——お引き取り願おうか、名探偵。これは、《ギアス》に仕える者たちの、世に出てはならぬ争いなのだ」

ピッチャードはそう言い残すと、のろのろと屋敷の裏口の方へ歩いて行った。

残されたコナンとアーサーは互いの顔を見合わせ、それぞれ相手が言いようのない無力感を抱えているのを見て取った。

「……こんな結末を、少しでも推理してたのか？」

「いや……僕はいま自分の愚かさに呆れ果てているところさ。ひと晩経てば、深刻な怒りさえ覚えるかもしれない」

「とりあえず、彼女を降ろそう。それから……レストレード警部に連絡するか？ もっとも、

この時間だとまた、どこかの酒場バーかもしれないが……」

何故か急におかしくなつて、コナンはクスリと小さく笑った。極度の緊張から逃れて、精神状態がおかしくなっているのかもしれない。

おそらく、アーサーも似たような状態だろう。そう思って相棒を見たコナンは、しかし、彼が真顔で何か考えていることに気がついた。

「……始末はつとを付ける……？」

アーサーはつぶやき、それから自らの言葉に気付かされたかのように、目を剥いた。

「不味い！ コナン、博士をーいや、もう間に合わない！ 走れ！ 屋敷から離れろ！」

「えっ、ア、アーサー！？」

「自爆じばくする気だ！ 研究室には、十分な量の流体サクラダイトがある！」

コナンは凍り付き、次いで、アーサーと一緒に全力で駆け出した。

月夜が照らす鉄塔は、ヘレンをぶら下げたまま、うわんうわんと鳴っている。鉄塔の鳴らす風音に背を向け、コナンとアーサーは屋敷の正門がある方向へと、走り、走り、遮二無二走る。

二人が公道に辿り着いた直後、隕石が落下したかのような巨大な炎と衝撃が、二人の背後で薄闇を駆逐した。

爆発は、ピッチャードの研究室を、屋敷を、小屋を、鉄塔を、そして吊り下がるヘレンを、すべて巻き込み、一斉に吹き飛ばした。

爆風に身体を持って行かれそうになったあと、コナンとアーサーは屋敷跡を振り返った。膨れあがる爆煙は山のように、燃え上がる炎は巨大な篝火よろしく、辺り一面を眩く照らしていた。

「……これもある意味、焼身自殺、か」

アーサーが呆けた声で言ったが、返事をする余裕など、コナンには欠片もなかった。

二人は顔色を失ったまま肩で息をしながら、月夜に燃えるロイロット家の残骸を、じっと見つめ続けた。

*